

私はフィリピン共和国、マニラで、NHKの番組制作コーディネーターをしている。今年の2月、NHK WorldのDirect Talkというインタビュー番組で、「女だから戦争を止めることができた」と語る和平交渉人を取材した。

フィリピンでは、政府軍とイスラム反政府軍の国内戦争が、2014年終結した。その交渉の政府側代表者は、ニノイ・アキノ大統領が任命したMiriam Coronel-Ferrer（ニックネームMiriam）教授。彼女は2023年、アジアのノーベル賞と言われている「マグサイサイ賞」を受賞したため、番組の主役と選ばれた。私は、彼女へのインタビュー取材の中で、世界に戦争の火種を消し止と広がる恐怖の中、改めて女たちがその火種を消し止めることができる力を持っていると実感、その秘策がバジャマトークだと、ミリアムさんが教えてくれた。

スペイン植民地時代から、ミンダナオ島に拠点を持ったイスラム教徒は自治権を求めて闘い続けてきた。第二次世界大戦後も武器を持ち続け、先祖伝来の土地に外国の資本が入るもとするとたびたび、抵抗を続けてきた。歴代の政権がインドネシアやマレーシアの助けを得ながら和平交渉を試みたが、決裂が続いてきた。2010年に和平交渉の政府側代表に女性が任命されたのは初めてだった。彼女はフィリピン国立大学政治学教授として様々な意見を政府に述べてきた人物。イスラム教徒の武闘派MILFの代表は、女性が代表者であることに抵抗感を示したが、次第に彼女の「忍耐強く耳を傾ける」態度に軟化していった。ミリアムさんは政府側代表団

事務方メンバーに少くも女性を増やしていった。するとMILF側は「われらイスラム教徒にも優秀な女性がいる。司法試験に合格している」と弁護士になったばかりのSha Elijah Dumama-Alba（ニックネームAnna）弁護士を紹介してきた。分厚い本のようなイスラム教徒側の歴史や文化に根差した要求書を開きながら、政府側が歩み寄るべき事項から交渉を進めた。そのうち、アナ弁護士は政府側と同数の女性の代表団事務方メンバーを仲間に入れ、Bansamoro（イスラム国）自治区を創設する立法原案を作り上げていった。両事務方メンバーの秘策は「バジャマトーク」。イスラム教徒の女性は女性たちだけなら、ヘジャブ（イスラム教徒女性のスカーフ）を脱いで、ベッドの上に座って、バジャマトークで討論に参加した。MILF武闘派リーダーの妻たちも集めて、「どんな暮らしを願う？」と自分たちの願いを語る場合も夜を徹してバジャマトークで頻繁に行った。

その結果、ライフル銃や手りゅう弾などMILF兵士が持っている武器を政府が高額で購入する形で集め、コンテナに納入、鍵を政府側とMILF側が持ち、コンテナは自治区内で保管することで終戦を同意。武器を手放して受け取ったお金で、農機具や家電を購入し、生活の再構築の資金となった。この自治区には豊かな地下資源が眠っていたため、天然ガスやレアメタルの採掘や、ミンダナオ島最大の湖周辺の農地の開発などは自治区の許可なしに行われなかった。自治区内の経済活動は政府に支配されなくなった。日本のJICAの道路建設支援も山岳地域から街へのルートである「農地からママーケット道路」を柱とするなど、自治区との協議

が進められている。そして現在自治政府の34人の役員のうち14人が女性。その多くがバジャママ姿で討論に参加したメンバーである。

2022年、ミリアムさんが共同提唱者となり、東南アジア女性平和調停者団体が設立され、ラオスに本部を置いている。東南アジアでの紛争は宗教に絡む問題が多いため、ミリアムさんの経験を活かしている。また、現在は欧米の和平に取り組みむ女性団体と連携し、ウクライナ、スーダン、パレスティナの問題にも頻繁にオンラインで話し合いを深めている。

私、穴田久美子にとって、社会人になったときの最初の仕事は地方紙の記者で、その新聞社にとって女性記者を受け入れるのは初めてだった。先輩男性記者から「君は女だから、議会や警察にはいかなくても良いから、学校や地域の行事、女性、高齢者、子どもに関する取材を担当してくれ」と言われた。ちよつとムカついたが、すぐに嬉しくなった。地域の働く女性や子どもたち、高齢女性から学ぶことが日々累積していった。その経験が今も生きている。もうすぐ前期高齢者になる私だが、フィリピンで出会った素敵な女性たちを取材し、彼女たちの思いや願いを、番組制作という形で伝えることができたの幸せを感じている。現在取り組んでいるテーマはオンラインによる児童性虐待、カカオ産業に新しい風を吹き込んでいる女性たち、LGBTQ+のバーフォーマーたち。フィリピンの舞台の番組がNHKで放送される時、カメラの後ろでウロチョロしている私がいるかもしれません。